

様式 4

<p style="text-align: center;">令和 5 年度第 4 回 富士見市社会教育委員会議 議事録</p>						
日 時	令和 5 年 8 月 2 日 (水)		開会	午後 7 時 0 0 分		
			閉会	午後 9 時 0 0 分		
場 所	富士見市立中央図書館 2 階 視聴覚ホール					
出席者	委 員	本田議長	渡邊副議長	蘇武委員	内海委員	秋元委員
		○	○	欠	欠	○
		小栗委員	関野委員	戸田委員	八木橋委員	深瀬委員
		○	○	○	○	○
	事務局	生涯学習課 主査、主任				
公 開 ・ 非 公 開	公開 (傍聴者 0 人)					
議 題	<p>1 あいさつ</p> <p>2 協議事項 (1) 議長、副議長の選出について (2) 第 3 4 期のテーマについて</p> <p>3 その他</p>					

議 事 内 容

1 あいさつ

2 協議事項

(1) 議長、副議長の選出について

【事務局】 第34期の議長と副議長について、議長を本田委員に、副議長を渡邊委員にお引き受けいただいた。

(2) 第34期のテーマについて

【事務局】 次第の協議事項にて「第34期のテーマについて」と挙げている。前回の会議でもお知らせしたが、今日の会議ですぐに決めるわけではない。今期お集まりいただいている委員のみなさんで、社会教育について、また生涯学習について理解を深めながら、富士見市の社会教育をよりよくするため、現状の課題等を踏まえつつ決定していければと考えている。過去の社会教育委員会会議で扱ったテーマとその成果については、資料にまとめたとおり。また今後テーマを決定していくにあたり、「社会教育」と「生涯学習」それぞれの定義と、国・県の動向について確認しておく。

【委員】 社会教育と生涯学習について、区別しなければいけないものなのか。厳密な区別は重要なことなのか。

【事務局】 国・県の資料において「社会教育」と「生涯学習」という語がそれぞれ使われているが、その違いが分かりにくいことから、社会教育と生涯学習の各定義についても確認した方がよいかと考えた。

【委員】 社会教育の方が、学び「合う」というイメージ。生涯学習と言われると、個人で学ぶ、という印象がある。公民館で行われている事業は、社会教育だと捉えていた。

【事務局】 資料により色々な定義がなされているが、概ねは今委員に仰っていただいたとおり。「教育」であるから他者の存在が想定されており、他者とのつながりの中で学んでいくことが社会教育。中央教育審議会生涯学習分科会より出された資料を見ると、「ウェルビーイング」という言葉が出てくる。また「デジタル社会への対応」、「社会的包摂の実現」、「地域コミュニティの基盤」、これらの実現が社会教育・生涯学習に求められるとされている。「VUCAの時代」と言われるが、未来が予測困難な時代においては人づくりが重要だと言われており、その人づくりが社会教育に求められている。そして、そのためには公民館など社会教育施設の機能の強化であるとか、デジタル社会への対応といった取組が求められている。

【委員】 富士見市においては生涯学習と社会教育を意識的に使い分けているのか。

- 【事務局】 生涯学習課は市民の生涯学習を奨励するという、働きかける立場であり、社会教育の観点に立っているという認識はあるかと思う。
- 【委員】 ふじみ野市では生涯学習課ではなく社会教育課という課名になっている。しかしやっていることは同じに見える。
- 【委員】 委員より、生涯学習と社会教育という言葉は明確に分けて捉える必要があるか、という発言があった。今集まっている委員はそれぞれに様々な経験、様々なバックグラウンドを持っており、生涯学習や社会教育といった言葉の捉え方も異なっている。ここで事務局より提示されたことには、その異なった捉え方をこの委員の中で統一するという意味がある。捉え方を合わせることで、今後2年間活動していく中で、議論がかみ合わないという事態を避けることができる。
- 【委員】 以前にもそういう議論は行ったのか。
- 【委員】 第33期においても行った。ただ、用語集を作成したい訳ではなく、委員の中で共通の認識を持った上で議論に入っていくという趣旨。
- 【事務局】 委員にご説明いただいた通り、第33期においても、社会教育や生涯学習といった言葉を使って議論していく上で、委員の中でそれぞれの言葉の使い方、意味の捉え方が若干異なっているように感じた。そこで、それぞれに対する認識を揃えていただいた上で議論を進めていった。今期においても、社会教育や生涯学習といった語の使用は避けることができないため、今後の会議の中で、34期の委員の中で語の捉え方を揃えていく必要があると考えている。そのため今回の資料に挙げさせていただいた。社会教育の意義について、中央教育審議会から出された「次期教育振興基本計画について」においても考え方は同じ。持続可能な社会の創り手やウェルビーイングの向上を、社会教育をもって実現していくとされている。埼玉県から出されている「埼玉県生涯学習推進指針」においても方向性は同じ。未来の予測が難しく、また環境問題といった世界的規模の問題など、今後を生きる子どもたちにはさまざまな困難を乗り越えていくための高い力が求められている。希薄化した地域のつながりを再生し、地域の力を高め、その中で人材を育成していくことが、社会教育に求められている。社会教育に求められる役割は大きい。そのような中で富士見市の現状はどうか、ということで、教育振興基本計画や生涯学習推進基本計画等を配布させていただいている。今後活用いただきたい。また今日は、委員がそれぞれ活動をされている中で、富士見市の社会教育や生涯学習の現状はどう見えているか、お話を伺いたい。国や県が目指す方向性を示しているが、富士見市にはどうあってほしいか、またどうあるべきか考えていければ、提言する内容も見えてくるのではないかと考えている。委員のみなさんには、それぞれ思いをもって社会教育や生涯学習の場で活動していただいている事と思う。皆さんが考える理想の姿はどのようなものか、理想をかなえるためには何が足りないのか、議論を深めていければと考えている。事務局としては以上のような流れを考えている。

- 【委員】 配布された資料について、「第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理【概要】」と「次期教育振興基本計画について(答申)【概要】」が中央教育審議会のもの、「埼玉県生涯学習推進指針(改訂版)概要」が県のもの、ということでしょうか。
- 【事務局】 ご指摘の通り。なお今回は概要版をお持ちしている。
- 【議長】 進め方の確認をしたい。まず各自で国や県の動向を確認したうえで、富士見市の状況について、現状をどう見ているか、良い点はどこで、なにが課題と考えるか、それぞれの視点から出し合う。また理想と考える姿もそれぞれ意見を出してもらい、整理していったら、その間にあるギャップを見ていく。そしてそのギャップを埋めるためには何が必要か考えていくという流れで良いか。
- 【事務局】 事務局としてはそう考えている。
- 【議長】 他に何か、こうしたらどうか等意見のある方はいるか。
- 【委員】 異論なし。
- 【事務局】 では早速、各委員から見えている現状を伺えれば。
- 【委員】 私は子ども大学ふじみ実行委員会からこの会議に参加している。子どもが小学6年生で、2～4年生の間はPTA本部で副会長や会計を、また市の審議会には都市計画審議会委員なども務めている。町会の活動にも参加しているが、普段は会計事務所に勤めている。ふじみっこ・夢みらいというNPO団体の理事も務めている。私から見た社会教育や生涯学習の姿について、私は、客観的に見た時にそれは社会教育だと言われたとしても、自分が活動したこと全てが生涯学習だと考えている。子どもが生まれる前は寝るために帰るだけの富士見市だったが、子どもが生まれてからは地に足をつけて子どもを育てようと思い富士見市の住民だと自覚したのが、はじめての生涯学習ではないかと考えている。子どもが大きくなるにつれて、いろいろな活動を通じてたくさん仲間ができた。今の地域や町会では、次の担い手がいない、や、民生委員はどうするか、などの話が出ている。私も日々細かな地域の困りごとに対応している。泥臭い話になってしまうが、生涯学習や社会教育という、これからの子どもたちに対して、こういう子を育てよう、こういう風に育てよう、という話になると、かなり先を見据えながら今の方針を考えていかなければならない。やっていることは毎日目の前のことを泥臭くやっているが、とはいえそういったことを子どもに伝えたことはなく、背中を見て育てていきたいところではある。私は富士見市の生涯学習や社会教育に対して何の不満もなく、不満が言えるほどわかっていないということでもある。ただ言えることは、子どもは富士見市で育つことで様々な恩恵を受けている。いろいろな体験をさせてもらったり、機会をもらったり、富士見市に育ててもらっている。なので、富士見市の問題などは考えたことはない。もしこうしたいな、ということが言えるのであれば、子どもたちに色々な体験をさせたいという思いがある。この思いがあるから、子ども大学ふじみの実行委員会に、第3期から今期の11期までずっと参加している。先日

は埼玉県のリアル体験教室に参加してきた。上尾の子ども食堂をやっている方が、富士見市ってすごいよね、と言ってくれた。他市から見るとすごいということが必ずしもいいこととは限らないが、大人の本気が子どもに伝わっていて、大人の活動が他にも伝わっていることが、私は大事なことではないかと思っている。

【委員】

私は子どもが小学校に入学するときに富士見市に引っ越してきた。住み始めて25年くらいになる。子どもとの活動を楽しみながら、今住んでいる地域の良さを残していくためには何かきちんと取り組んでいかなくてはと思った。子どもの活動を真ん中に据えると、その周りに大人がゆるやかにつながって、子どもの活動に対して「ダメだよ」と言ってくるような人もいないので、地域が温かくなりそうだなと思った。25年前の引っ越してきた頃、富士見市は社会教育がとても進んでいるところだと聞いた。市民が主体的になって動いていて、市の広報以外にも社会教育だよりというのがあり、市民がコラム委員会として集まって話し合いをし、一面を執筆していた。それくらい社会教育活動が活発で、公民館もすごい所だと聞いていた。確かに自分も引っ越してすぐ公民館活動に係るようになったが、公民館で人がつながっているということを感じた。町会の集まりでお楽しみ会があった時に、お月見一座に誘われた。一回遊びに行ったら、次から台本に名前が入っていた。そうやって人とつながることができ、お月見一座の方も全然知らない人ばかりだったが、付き合っていく内にそれぞれが地域の中で活動しており、地域を大切にしている人なのだということがわかった。お月見一座は26年くらい続いており、市民の活動は思いの強い人たちが集まって始まっていく。高齢化などにより数十年前に始まった活動の継続が危うくなることはあると思うが、お月見一座がなぜ続けているのか考えてみた。お月見一座は演劇をする団体だが、演劇が好きだからといって集まっているわけではなく、地域愛の深い人の集まり。みんな地域のことが大好きで、集まると地域のことを話している。仲も良い。何が大事なのか考えた時に、地域愛が大事だと思った。南畑は外から移り住んでくれている人も増えているし、自分も富士見市に引っ越してきた時に知っている人が一人もいなかった。子どもにも友達が出来るか心配だったが、お月見一座に入らないかと言われて入って見たら、帰りが遅いから送ってあげるよ、と声をかけてもらったり、どこそこのお嫁さん、というみんな知っていたり、道を歩いていると通りがかった車が、乗っていきなよと声をかけてくれたり、顔がわかっているっていうのは大事なことだと思っている。私はそうやって声をかけてもらったから地域の中に溶け込めた。だから小さい子どもがいて地域に飛び込んだ人たちが、楽しく、ここに越してきてよかったと、地域に誇りを持ってもらうことがとても大事なことだと思った。それで幼児サロンというのを始め、始めた頃はやってあげる、という雰囲気だったが、長く続けているとその参加者の人たちがスタッフになってくれて、今スタッフがとても若いお母

さんたち。そうするとアイデアもすごく新鮮だし、パソコンなども得意だし、世代をこえたお付き合いをしながら、運営している。そしてそこを卒業した人が、地域子ども教室に関わってくれている。長く地域で一緒に活動しているので、若いお母さんともとても仲がいい。その中に私も入れてもらって活動している。それぞれ年代ごとに得意なことは異なる。高齢の方にパソコン作業をお願いしても、携帯すら持っていない人もいる。でも、たとえば楽器の運搬などは、たくさんの方が助けてくれる。若いお母さんたちは新しいアイデアを出してくれるし、得意な分野が全然違う。私はちょうどその間の年代で、両方の世代から助けてもらっている。地域愛を基に地域の活動は成り立っている。一時期公民館が危うい時期があった。交流センターに流れそうな時期があり、それだけはやめてほしいと思っていた。地域愛も大事だが、人々をまとめていくところ、居場所として公民館は大事だと思っている。公民館は人を集めるし、事業を行う時に、地域の中の特技がある人を講師として迎えて、地域の中のつながりを築いていく。社会教育主事が大事だというのは、その人をつなげる役割が大事ということではないか。公民館は一部の人のものではなく、参加する人としらない人がいるかもしれないが、参加しない人がいたとしても、参加した人がその日どんなことがあったのか、参加しなかった人に教えてあげることも、それはそれでつながりとなる。一部の人がしか使わないから公民館はいらない、ではなく、公民館ですべての人がつながれる、というのが、公民館は社会教育としてとても大事な拠点だと考えている。地域の拠点として、何かあった時に人が集まるのが公民館。今は公民館は4館だが、地域ごとに公民館があって、そこに人が集うことができる、そこで地域の人達がこの地域大事だよ、と確認し合い、誇りに思い、それぞれの地域で違っていいと思うが、自分たちの地域はこういういい地域なんだ、と誇りを持つことが大切ではないかと思っている。今は働いている人も多く、南畑には放課後児童クラブはなかったのだが、今は第二まで出来ている。働いている人が多いのだと実感があり、PTAや育成会の活動は今までのようにはできなくなっているという現状は感じている。この現状の中でどうやっていくか。こういう現状だからできない、ではなくて、どういうことならできるか、考えていかなくてはいけないと思っている。公民館の重要性、そして地域愛。働き方の変化等もあるが、上手くやっていきたいと思っている。

【委員】 民生委員として活動している。地域にもよると思うが、つながりが希薄化していると感じている。私は勝瀬地区を担当しているが、ふじみ野駅近辺の世帯と、古い住宅が多くある渡戸の世帯と、分かれている。どちらにしても若い世代と高齢者の世代とのつながりが欠けてきているのではないかと思っている。高齢の方は、若い頃はPTA活動など学校を通したつながりがあったと思うが、60代～80代になってくると、それぞれ子どもたちがその場所から居なくなっ

てしまっており、独居の方も増えてきている。新しい人が地域に越してきたとしても、町会への加入など避けるようになってきている。新しく越してきた住人と、もともと住んでいる住人のつながりは、非常に希薄になってきているように感じる。町会への加入者も減少しており、ここ数年はコロナの影響もあり、町会の行事もほとんど思うようにできなかつた。つながりの希薄化に拍車をかけている。マイナンバーカードも導入される時、高齢の方達は一人じゃ難しいのでとても困る、という声をよく耳にした。若い人は携帯などですぐできるかもしれないが、高齢の方は市役所まで行って、一つひとつ説明してもらわないとならず、また子どもが遠くに住んでいると子どもに聞くということもできないということで、デジタル化の問題は、若い人にはいいかもしれないが、高齢の方からはとても困ったという話は随分聞いている。つながりの希薄化、そしてデジタル化、この2点が問題ではないかと考えている。

【委員】 私は富士見市のなにかの団体に所属して活動しているという訳ではないが、企業の中で地域の復興支援などに携わってきた。そういった立場で富士見市を見た時に、いろいろなことに取り組んでいるな、広報しているなと思う。しかし一方で、市の発信ということで仕方のないことなのかと思うが、場当たりのやっているように見える。グランドデザインがある中で発信しているのではなく、寄せ集めたことの成り行き発信でしかないように見える。何を理想とするか、いろいろな考え方があると思うが、国や県の取組の方向性がある中で、富士見市は何に重点化して取り組むのか、国や県と足並みをそろえるのか、はたまた富士見市ならではの独自のことをしていくのか、しっかりと決めていく必要があるのではないかなと思う。富士見市で行われている活動は多くあるが、団体名を隠すと、はたしてどこの市の取組なのか見えなくなる。それでいいのかなどうか、決めていく必要があるのではないかなと思っている。また関わっていない立場から恐縮だが、主体的にやっている人は楽しくやっていて、それはもちろん結構なことだが、一方で関わっていない人たちからすると、その輪に入っていけない雰囲気があるように感じている。富士見市だけの問題ではないが、既存の枠に入れず遠巻きに見ている、そしてなかなかつながりが築けない、という問題が生じているのではないかなと思う。閉鎖的になっているその壁をどう壊すのか、これもひとつの課題なのかもしれないと考えている。

【議長】 今は志木市に住んでおり、また川崎市の団体でも活動している。志木市と比べると、生涯学習や社会教育は活発だと思う。広報を見ると載っている情報が多く、楽しそうなものも多い印象。市民の方が自主的にやっている草の根的な活動は盛んなのだと思う。子ども食堂の数も多い。川崎市と比べると、川崎も熱心に活動している印象。都市の大きさも違いはするが、川崎の方がやっていることが派手で、しっかり発信されていると感じる。こんなことをやっています、という情報が、富士見市ではあまり入ってこないが、川崎市はよく耳

に入ってくる。情報の発信や、発信主体の規模など、先程委員の発言にもあった重点化の話にも関わってくると思うが、外からの見え方や規模感が違うように感じる。川崎市は企業が絡んでいるなど、大々的にやっているように見える。また自分の経験から、私は子どもが保育園の途中から保護者行事に駆り出されるようになり、そこから活動が続いているが、それまでは全く縁がなく、地元愛もなかった。なにかのきっかけがない会社勤めの人が多いのではないか。しかしなにか一度きっかけがあると、楽しくなって活動している方が多い。土壌はあるのだと思う。どうやっていい形で入ってきてもらうか、富士見市に限らず課題なのだと思う。どうやって内側に入るか。またこれも委員から話があったが、古い人で固まっていることもあり、結局新しい人が居場所を見出せず出ていってしまう。昔からある活動だと、新しい人が上手く溶け込めていないという印象がある。NPOで、学校の授業などを通じてキャリア教育などをやっているが、上手な所は、学校、保護者、地域が有機的につながっている。学校もPTAでまとまって活動しているところが多いと思うが、地域の人や企業など、地域の人材をもうちょっと上手く巻き込めるのではないか。学校に限らず、地域同士で、個々ではなく、それぞれの活動がもっとうまくつながったら、新たな可能性が生まれたりするのではないか。居場所活動をしている中で、こども応援ネットワークというのがあるが、子ども食堂など子どもの居場所づくりに係る団体が複数集まって、各活動でつながっていきこうと提案し始めている。個々で頑張っているところが、つながっていないために発信力も弱かったり、一緒にやればできることが、単体だと難しかったり、うまくつながればできることはあるのではないかと考えている。

【委員】 ITの仕事をしているが、コロナ禍を機にリモートワークになり、家にいる時間が長くなった。そうすると地域に目が向くようになり、ふじみ野市の社会教育課に知人が勤めている関係から、その人が色々な活動に声をかけてくれた。その中で外国人の方向けに一緒に散歩して街を案内するような活動があった。その養成講座に参加したところとても面白く、こういった社会教育活動に取り組むようになった。ふじみ野市だけでなく、富士見市にも外国の方は多く住んでいて、イベントをやるにあたりポスターを貼るため、地域にある外国人向けの食料品を扱うお店に足を運びポスターを貼らせてもらった。その時にあるお店の方に言われたことがショッキングで、自分たちは自分たちの国の仲間がいるから日本人とは関わりたくない、というようなことを言う方がいた。そこから色々な問題について考えるようになった。イベントには多くの方が来てくれたが、来てくれる外国人の方は経済面など大きな問題なく日本で過ごせている方達。しかし本当は問題を抱えている方などみんなに参加して貰いたい。その壁をどうやったら越えることができるか、今の活動の課題だと考えている。またこれまで各期提言書を作成していると思うが、この提言書が富士見市でどう生かされているのか気になった。

教育部だけでなく、他の部局でどのように生かされているのか。また広報8月号に載っていた記事で気になったところがある。講座の対象が年代や居住地、性別が制限されている点。対象者を限ってしまうのは、今の多様性を生かしていこうという社会とは合っていないのではないか。批判したい訳ではなく、アンコンシャスバイアスなど、誰しも多様な人がいる中で他の人がどう感じているか気付いていないことがある。その壁をこえてみんなで交流するというのが社会教育ではないか。私もふじみ野市の講座などに参加したいと思っても、対象が市内在住に限られてしまうと応募もできない。社会教育とは交流を促すものであって、参加者の募集のあり方も見直してもいいのではないか。また第33期の提言書の中で事例の紹介があり、小学生向けの講座を開催している団体の例が載っているが、分析が足りていないのではないか。成功している事例について、なぜ成功したのかもっと具体的にまとめていくとさらに横展開していきやすくなるのではないか。また団体交流会のような、成功している団体の様子を見学するなど団体同士の交流も大事ではないか。いろいろな団体の活動を見学させてもらっているが、盛り上がっている団体とそうでない団体がやはりあり、盛り上がっているところは活動が楽しいのだと思う。盛り上がっていない団体は、先程委員のお話の中にもあったが、壁を作ってしまったように感じる。本人たちは社会のため、みんなのためという気持ちでやっているかもしれないのに、方法が適切ではないのではないか。富士見市の社会教育として取り組んでいった方がいいのではないかと思うことは、社会教育を広く市民に、ではなくて、視点を変えて団体の担い手の方たちを集めて勉強し合うなど、教育の対象者を変えてみるのも一つの手ではないかと思う。

【委員】 自分がどうしてこういう活動をしているのか考えた時に、私は母親がPTAなど子ども関係の活動に取り組んでおり、社会教育課とかかわりを持っており、16ミリフィルム映写機を借りに行くなどしていたので、社会教育課とはそういうことをするところ、と漠然と思っていた。子どもが生まれて保育園で保護者会、小学校で学童の保護者会やPTA、中学校でPTAの役員を務めてきたが、振り返ってみると全て子ども関係。社会教育といっても子ども関係のことしか意見できない。教育振興基本計画審議会にも参加しておりその時にも言ったが、市はアピールが足りないのではないか。知っている人は知っているけど、知らない人は全く知らないという現状がある。これでもかというくらいアピールしないと、市民全員には伝わらない。入間地区社会教育協議会の会議に出た時に、やはり公民館がコミュニティセンターに様変わりするなど、どんどんなくなってしまっているという話があった。埼玉県も大分様子が変わっている。自分たちはPTAではない、と言っているところもあるし、市のPTA連合会から抜けてしまっているところもある。加入していてメリットありますか、強制ですか、という言葉を必ず言わ

れる。こういった会議もそうだが、ボランティア精神で参加している。強制じゃなければやらないというのは、どうなのかと思う。多くの方は、やりたくないと思っても子どもたちのためにと参加してくれている。しかし自我というか、個人を大事にする人、悪く言うとわがままな人は、私はやりたくないから強制でないならやらないと言う。生涯学習、社会教育といった時に、そういった人たちも対象としていくのか、意識のある人だけを対象としていくのか、どちらがいいのか。私は地域子ども教室連絡協議会から参加しているが、子ども教室も後継者不足のところが多い。活動を休止した地区もある。私のところも、5年後、10年後を考えると安泰ではない。上手く人材の活用を考えていく必要がある。後継者を見つけてくることも大事だが、OBやOGなどを上手く巻き込んでいかないと難しいのではないかと考えている。

【委員】 富士見市に住み始めて30年以上経つが、地元に関わりたいという気持ちがあった。電話線を使ったコンピューター通信システムがあり、富士見市内でも学童保育に関わっている方々がそのシステムを運営していた。興味があったこともあり、活動に参加するようになった。富士見市ビデオクラブの方ともつながりができた。その後技術が進んでインターネットが普及し、公民館などでもパソコン教室が開催されるようになった。富士見市では市民団体が講師として、市民が市民に教えていた。また定年以降は時間に余裕ができたので市内でおもしろいことはないかと探していた時に、市民学芸員というものを見つけた。講習を受け、今も市民学芸員として活動している。私はまだ活動を始めて6年目だが、多彩な方がいる。閉鎖的な面もあるかもしれないが、参加していると楽しいし居心地は良い。私自身は富士見市の生涯学習や社会教育で楽しませてもらっている。また難波田城資料館で開催されている古文書の会というのがあり、地元に係る文書を読もうということで活動している。今は川越藩の武士が書いた文書を読んでいるが、とても面白く、やっていて楽しい。社会教育は自分にとってはエンターテインメント。楽しいことを一緒に勉強していくものというイメージがある。あまり難しく考えず、自分が楽しむものと受け取っている。

【事務局】 今回いただいたご意見等を、次回さらに深めていければ。また理想の姿も考えていければと考えている。

【議長】 今回出た意見は主観的なもの。裏を取っていく必要があると考えている。資料等にまとめられている情報を確認しつつ、皆さんから出た話が実際はどうか、突合せしていきながら、出た意見をカテゴライズして、どんなことを感じているのか整理するのももちろん大事だが、事実と突き合わせるというプロセスが大事かと思う。事実はこのように、どうしてこう見えているのか、という気付きもあるかもしれない。

【委員】 次回までに取り組むこと、宿題のようなものはあるか。

【議長】 今回はなしで良いかと思う。各自資料等の確認を進めてもらえれば。

【委員】 生涯学習とは、社会教育とは、という話が出た。正解を求めてネット検索などやり過ぎてしまうと、思考の枠が固まってしまうように思う。あまりそこにまい進されないほうがいいのではないかと個人的には考えている。一般的な解釈を押さえることは大事だと思うが、そこに拘泥してしまうとつまらなくなってしまうと思う。自分の経験や観点を持っていた方が楽しいかと思う。学術的に捉えていきたい訳ではなく、実践者としてどうしていきたいか、という視点で考えていった方が楽しいと思う。

【委員】 事務局をお願いしたいのだが、委員のお話の中で、富士見市の社会教育はレベルが高い、という話があった。富士見市は、他の市と比べた時にどのくらいのレベルなのか、調べておいてほしい。

【委員】 社会教育だよりを読んだことがある。ぜひ他の委員にも読んでいただければと思うので、ご用意いただければ。

3 その他

【委員】 7月31日に、西部地区人権教育実践報告会に参加してきた。全体会では人権作文発表会があり、とてもよかった。兄が支援学校に通っているという子の発表があった。支援学級と普通学級の交流があった時にお兄ちゃんが声をかけてくれたが、みんなの前で名前を呼ばれるのがとても恥ずかしかったそう。でもそれでお兄ちゃんが悲しい思いをしてしまったのではないかと思い、今後そういう機会があった時には自分からお兄ちゃんに声をかけたり、お兄ちゃんが来た時には、私のお兄ちゃんだから、と紹介したりと、その子の成長が描かれていた。人権教育とは堅苦しいものではなく、そういう子どもに育つような環境をつくっていくことが大事なのだと感じた。例えばお家で、お兄ちゃんに声をかけられて恥ずかしかったと相談した後、親がどう答えるのかはとても重要。そんなこと言ってはダメ、というのではなくて、気持ちを受け止めながら、お兄ちゃんはお前さんのことが大好きなんだね、という投げかけがあれば、その子は自分で受け止めて、自分で考えることができる。作文を発表した子も自分で考えて変わっていったのだと思うと、環境はとても大事だと思った。また「子供」の分科会に参加したが、小規模幼稚園と中学校の事例発表があった。小規模幼稚園の方は、小規模だからこそ先生たちが子どもたちの声をしっかり聞くことができている、すばらしい環境だと感じた。人員配置はとても重要で、先生が足りないと、子どもに寄り添うことも難しくなる。子どもがSOSを出せる環境を整えること、先生同士が子どもの状態などを共有できる心のゆとりはとても重要だと思った。また人に大事にされた子どもは、人を大事にすることができる。大きくなったときに、上の子が下の子の面倒を見るということができている。中学校の方は、教師の人権感覚を磨くことが大事で、先生たちの学習も怠っていないという話だった。

【委員】 入間地区社会教育協議会の会議に参加してきた。秋に社会教育委員研修を開催しており、今年は10月18日に開催される。内容について話し合い、これまではコロナの影響で分科会を中止していたが、今年はもとに戻す方向。基調講演と分科会で、「社会教育委員とは」「社会教育委員と社会教育施設」「社会教育委員と学校」という3つの分科会を開催する。